岐阜県徳山村及びその周辺地域のわらべうたの伝播・伝承について（II）

——藤橋村東横山のわらべうた——

仲　野　悦　子・高　木　靖　弘

On the Transmission of Children's Folksongs in and around Tokuyama Village, Part II

——The *Warabeuta* (Children's Folksongs) in Higashiyokoyama Fujihashi Village——

Etsuko Nakano and Yasuhiro Takagi

For the last two years we have investigated children's folksongs in and around Tokuyama village. In this paper we report a result of the investigation, that is, what kinds of folksongs survived in Higashiyokoyama Fujihashi, and how they underwent changes, if any.

は　じ　め　に

ここに報告する「岐阜県徳山村及び周辺地域のわらべうたの伝播・伝承について」は，第Ⅰ報の「徳山村のわらべうた」に続くものである。

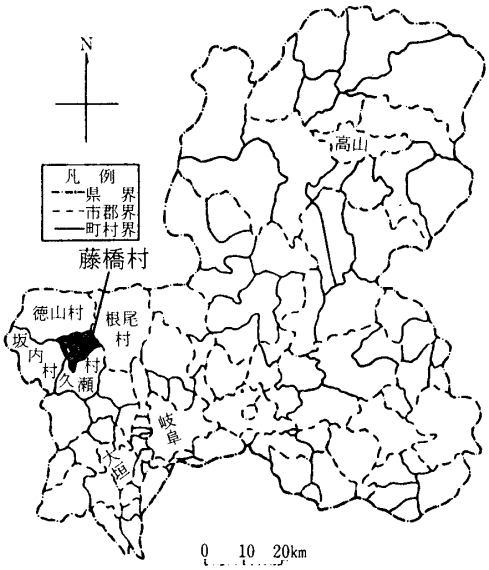
過去8年間，徳山村全村のわらべうたを調査，採集し，「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告」（聖徳学園女子短期大学紀要第5集～10集）にまとめられた。その最終報告にも指摘したように，「徳山村のわらべうたの分布状況ともかかわって，徳山村周辺地域のわらべうたを調査研究する事により，伝播・伝承状況を把握されなければならない。」としている。この目的の一つとして，揖斐川下流南東部の隣接村——藤橋村東横山地区のわらべうたを採集する機会を得た。歴史的に揖斐川下流との交流を多くもつこの村の文化が，わらべうたを通して徳山村とどのように関連するのか，比較検討するのも興味深い事である。

この研究は，昭和59年度文部省科学研究費補助金一般研究（C）により行なったものである。

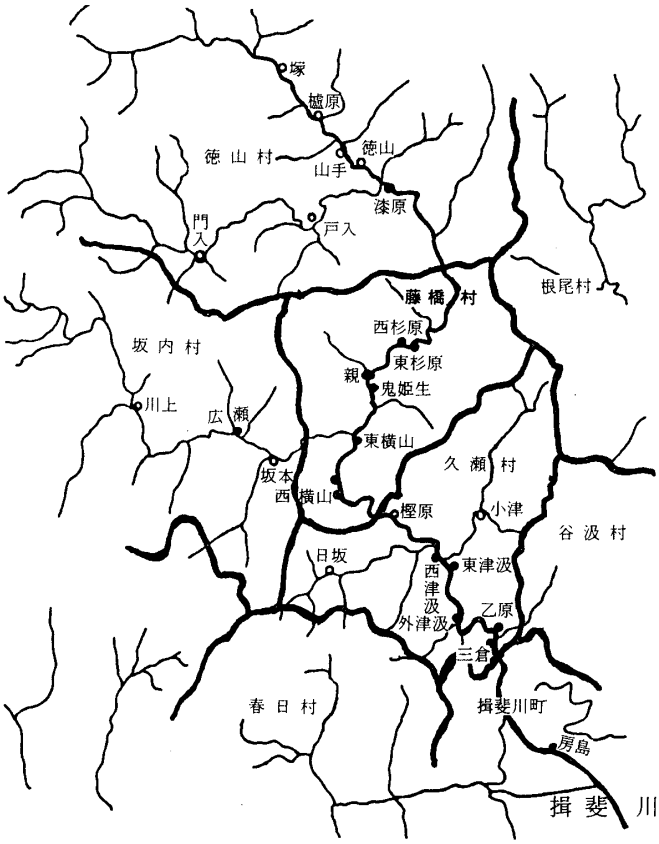
Ⅰ

〈藤橋村東横山の位置〉

岐阜県揖斐郡藤橋村は，美濃の北西部に位置し，南は日坂峠を隔てて久瀬村の日坂に，又揖斐川下流に沿って樫原，西津汲へ，西は坂内村の坂本，広瀬へ，北は揖斐川上流の徳山村へ，東は久瀬村小



図―1　岐阜県における藤橋村の位置



図―2　藤橋村周辺地域

津及び本巣郡根尾村に接する。

藤橋村は幅の広い所で東西10.9キロメートル，南北11.2キロメートルあり，北部の幅が広い三角形をなし，徳山村に源を発する揖斐川の本流が，北西から南東へ曲流を作っている。

周囲は1000メートルを越す越美山地に囲まれ，総面積6878 ha のうち水田が32ha，畑が 6 ha で，合計すると耕地が38ha と全体の0.5%にしか満たない。残りの95%は全て山林である。

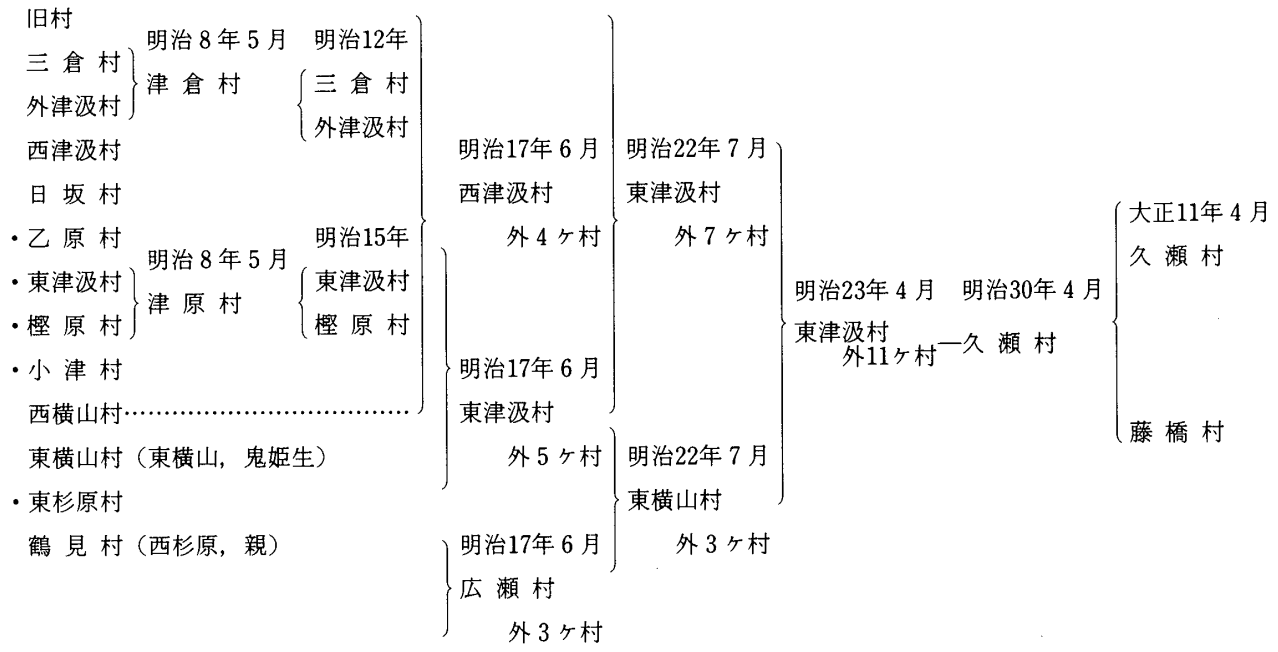
夏の南東季節風がもたらす雨と，冬の北西季節風による深雪により，県内でも最多雨地となっている。

このような位置に東横山（東横山・鬼姫生）は他の 3 部落，西横山，東杉原，鶴見（西杉原・親）と共に藤橋村を形成している。

〈藤橋村東横山の歴史―藤橋村の誕生〉

この村の歴史は極めて古い事が土器や石器の出土により明らかではあるが，地形的に見ても，一定の場所に集落を作り永住する事はなかった。古代の頃には，信仰関係の伝承や記録の中に現われ始め，この地域を美濃国とされ，揖斐川の右岸が池田郡，左岸が大野郡に所属されている。中世には久瀬村の各集落の成立を見，自給自足の共同体が生まれる。近世においては幕府体制が強化され，日本の中央にある美濃国は，交通の要所をなし領土の分割配置も充分考慮され，谷の出口に近い乙原や，揖斐川と広瀬川の合流地―両横山部落を尾州親藩領にするなどした。

明治になって行政区画が多少変化する中で(図―3参照)，最終的に今日の姿となったのは，大正11年である。地形的に南北に長い村での村政の実施は不便が多い事や，役場が東津汲にあるために公共施設を利用するにも無理が出てきた事により，久瀬村から四大字が分村し，新たに藤橋村として独立した。



図―3　村　の　変　化

揖斐川総合開発としてダム建設が新たに計画された。それが横山ダム・徳山ダムである。横山ダム建設が先行する形で進められ，昭和39年6月完成し，親（おや）・鬼姫生（きびゆう）地区が水没した。又杉原ダム建設計画により住民は生活基盤が危ぶまれ，昭和55年11月，「杉原地域整備事業の実施に関する協定書」が水資源開発公団と杉原地区ダム対策委員会の間で調印され，57年より移転が始まった。このダム建設により，徳山村と一番交流があったと思われる杉原地区でのわらべうた調査研究はできなくなった。

〈藤橋村の交通〉

明治前期までの道路は揖斐川に沿ってつくられ，徳山村から東横山，更に揖斐川へと川の東岸の山道を利用していた。又西横山から坂内村へ，そして鉄嶺峠（くろがね）を経て近江へ続く山道は多くの村人や旅人達が利用し，近江との文化交流に役立った。

明治25年，揖斐～徳山線（北山街道）の内，揖斐～横山間の東道が開通し，明治33年には鬼姫生～西杉原まで，明治40年頃に徳山まで開通した。明治27年，横山～坂内線（坂内街道）も開通した。その後路線変更となり，揖斐～高月線（岐阜～木之本線，国道303号線），徳山～池野停車場線（大垣～鯖江線417号線）となる。

このような交通機関の発達に伴ない，物資の輸送は，荷物運搬人（持子・歩荷（ぼっか））の人背から荷車（大八車）そして荷馬車になり，昭和初期頃になると貸物自動車へと移った。

江戸末期までの交通路は殆んど陸路であったが，揖斐川を利用しての水路が伊勢の桑名まで開け，木炭木材の運搬に利用された。

揖斐川本流と広瀬川の合流点であり，河船溯航の終点の湊町となった東・西両横山は，北山街道における交通の要地であった。8月から3月までが流送期で，荷馬車よりも大量に輸送が可能である事により盛んに利用されたが，大正4年西横山第一発電所，大正10年東横山第二発電所ができ筏流しが困難となり，昭和15年西平ダム完成により終止符を打った。この間道路は改修され，貸物自動車が導

入されるに至り，危険を伴ない，下る時しか輸送できない船輸送は次第に衰退していった。

陸・水路の中継地点であった両横山は，商人・仲買人などの出入が多くにぎわい，旅館や馬宿や飲食店もできた。徳山の人達も揖斐方面に出る時は，この地で一泊しなければならなかった。又ダム建設工事に伴い，工事関係者が多数入り，この地を〝小揖斐〟（新揖斐）と言われる程に発展し，戸数も増加した。東横山の戸数変動を見るとこの事が顕著である。

表1に見られるようにダム建設により一時的な増加現象があるものの，次に建設予定されている杉原ダムにより，藤橋村はより一層過疎化の方向に進んでいる事に違いない。

表1　東横山の戸数

年	戸数	人口	備考
嘉永4年	43戸	241人	北山街道の交通要地として発展
明治14年	80戸	362人	
明治22年	81戸	396人	
明治40年	110戸		
大正9年	324戸	1,868人	東横山発電所工事
昭和8年	120戸		
昭和33年	90戸	302人	
昭和35年	200戸	2,001人	東横山ダムと発電所の工事
昭和43年	97戸	284人	
昭和46年	92戸	264人	

II

〈調査地域及び時期〉

岐阜県揖斐郡藤橋村東横山

岸千代氏宅にて

1985年3月29日　午後1：00～3：00

〈演唱者について〉

今回の調査は徳山村地域におけるわらべうたの伝承・伝播をさぐる目的で，その周辺地域すなわち藤橋村東横山のわらべうたを知る機会を得た。勝善寺の住職横山周導氏の紹介により，岸千代氏という演唱者を知り，今回沢山のわらべうたを採集・採譜化できた。81才という年令にもかかわらず，歌詞もリズムもはっきりしており，次から次へと流れるうたを，日頃思い出しては書きとめてあるメモを見ながら歌ってもらった。今もなお，早く亡くなられたご主人の薬屋さんを営んでおられ，「80才まで一人で生活したいと子供達に話しているがもう81才になってしまった」と笑いながら話しておられる程お元気である。子守り唄を歌いながら，「昔は子守りは子供達の仕事だった」とか「てんまり唄のまりはもうゴムまりがあり，お金持ちの子供しか持っていなかった」というエピソードを聴かせてもらいながら採集した。

岸氏の生年月日は次のとおりである。

明治37年9月25日　　81才

〈東横山のわらべうた〉

今回は一人の演唱者であったにもかかわらず，20曲というわらべうたを採集する事ができた。以下に採集したわらべうたをあげておく。

(1)	もりのういのは秋冬五月	子守り唄
(2)	もりのういのは秋冬五月	子守り唄
(3)	ねんねこぼしのお寺には	子守り唄
(4)	一つでは乳を飲みそめ	てまり唄
(5)	おしろのさおんさのさ	てまり唄
(6)	向かいの山にだれたてた	てまり唄
(7)	うちのうらのちしゃ木に	てまり唄遊び唄
(8)	ついてこついてこ	てまり唄
(9)	大黒様という人は	てまり唄
(10)	れんげの花とすもとり花と	てまり唄
(11)	しんしんしっかり受けとり申せば	てまり唄
(12)	てんまりつくのに邪魔する子は	てまり唄
(13)	おらがおばさは	てまり唄
(14)	一の木二の木三の木桜	てまり唄
(15)	うらのお夏はよいさのさ	手遊び唄
(16)	なかのなかの小坊主	手遊び唄
(17)	おねの子ねのどの子が欲しい	子もらい遊び唄
(18)	おひとつおひとつおさらへ	お手玉唄
(19)	いちばんはじめの一宮	てまり唄手おどり唄
(20)	じょりかくし	鬼きの遊び唄

採集したわらべうた全体（20曲）を見ると，てまり唄が12曲となり，他の子守唄（3曲），手遊び唄（2曲）などの唄に比べ，大半を占めている。この現象はどこの地域にも見られ，徳山村でもそうであったようにこの藤橋村でも同じ事が言えそうである。様式的に見てみると陽旋法の曲が12曲，陰旋法の曲が6曲，残りの2曲は長音階で構成されている。

(1)と(2)の子守唄「もりのういのは秋冬五月」は，歌詞が同じであるにかかわらず，メロディが違っている。同じ音域をもちながら(1)は明るく，のびのびとした流れを感じさせ，陽旋法の構造に対し，(2)は暗く，静かな感じを受け，構造的には陰旋法である。アウフタクトで始まるこの両曲は，(1)ははじめ長3度で動きをつけ，1点dから2点dという音域に対し，(2)は長2度，短2度と進行し，音域も一音低い1点cから2点cとなっている。岸氏によると，子守りをしている時，最初は(1)の高い方のメロディーで歌い次第に眠気をもよおしてきた時に低い方のメロディーの(2)の唄を歌ったそうである。そうしないと子供が寝てくれないとの説明があり，この両曲は対になって歌われていたようである。

この村で大半を占めるてまり唄のまりは，ゴムまりを用いたそうである。徳山村とは違い，この東横山は交通の要地であった事により，物資も豊であった。徳山で遊ばれていた，ぜんまいの穂綿を使っ

た糸まりよりも，より弾んだと思われるゴムまりは，子供達の大切な遊び道具として村に入った。最初は金持ちの子供しか持てなかったまりも，自分の手に持つ事ができるようになると大事にし，毛糸でカバーを作りくるんで遊んだそうである。

言葉は東横山独自の言葉――方言――があるにはあったが，当時はいろいろな人が出入りする中で恥ずかしくてあまり使わなかったそうである。今は方言！方言！と言って大事にする傾向があるが，当時は反対に隠そうと努力したそうである。商人，ダム建設工事人などの多くの人々が出入りする中で，言葉も自然に入り交り合ってしまった。今でも年寄りは時々使うが若い人達は殆んど話さないと言っておられた。例えば（16）の「なかのなかの小坊主」の中に出てくる「背が低くなった」は「たごむ」と言い，「背中が曲る」という意味を持つ。この言葉は徳山村の門入でも言われていた。

III

〈徳山村のわらべうたとの比較〉

過去6年間に亘って徳山村全村のわらべうたを採集した結果，105曲のわらべうたを得る事ができた事はすでに報告した。（岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告〈第17報〉p155～p157）さらに「岐阜県徳山村及びその周辺地域のわらべうたの伝播・伝承について」の第Ⅰ報で，69曲というわらべうたを，年代を広げ採集，採譜化されたが，この第Ⅱ報のこの章での徳山村のわらべうたとの比較は，105曲に限定し比較考察するものである。

藤橋村東横山で新たに採集されたわらべうたは，

(2)　「もりのういのは秋冬五月」

(4)　「一つでは乳を飲みそめ」

(8)　「ついてこついてこ」

(9)　「大黒様という人は」の前半

(11)　「てんまりつくのに邪魔する子は」

(13)　「おらがおばさは」

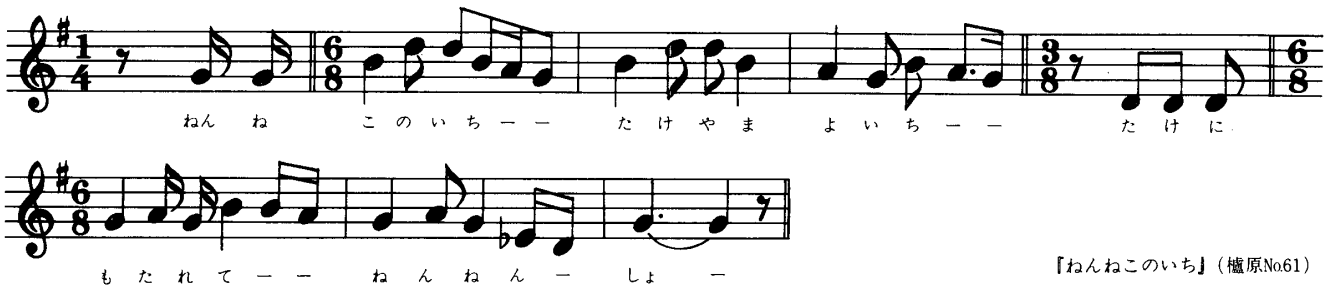
(15)　「うちのお夏はよいさのさ」

(18)　「おひとつおひとつおさらへ」

(19)　「いちばんはじめの一宮」

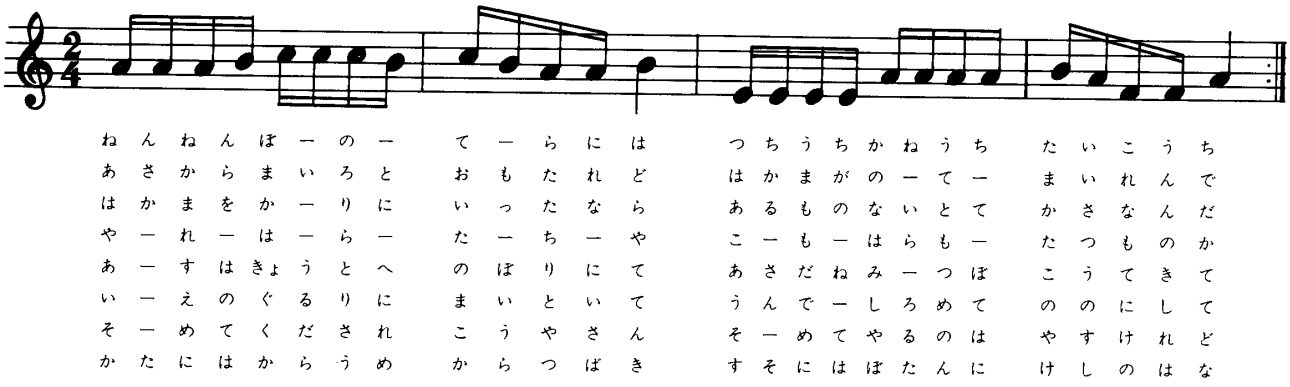
の9曲であり，残りの11曲は同歌・類歌としてあげられる。

(1)の「もりのういのは秋冬五月」は徳山村でもよく歌われ，（曲番　72，61，44，14，85，34）歌詞も豊富にある。ここでは，「ねんねしなされ今日は二十五日～」，「誕生日にはなにして祝う～」，「守はきちがい泣く子をたたく～」，「ねんねころいち竹馬与市～」，が全く同じであり，最初の歌い出しの「もりのういのは～」も多少の変化を見るが同歌として見るべきであろう。まだまだ他に多くの歌詞があったと話された。当時，子守は子供の仕事として，どの村でも子供達は親にかわって弟や妹の面倒を見，その時の苦労が多くの歌となって歌いつがれているのであろう。



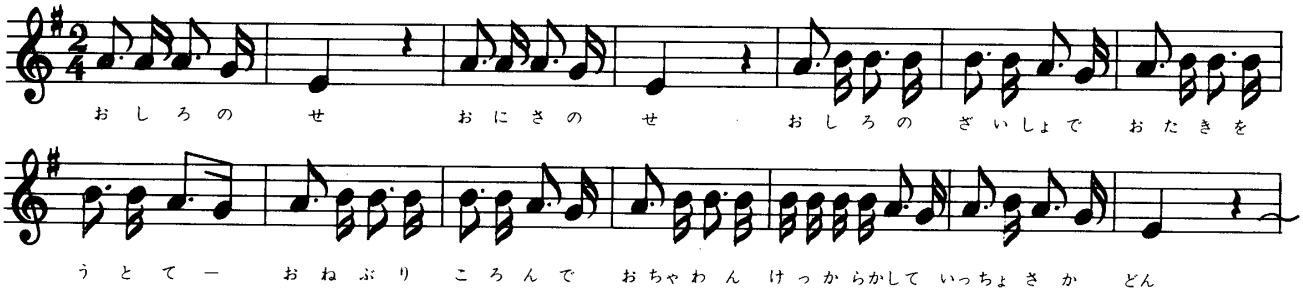
『ねんねこのいち』（櫨原No.61）

(3)の「ねんねこぼしのお寺には」も子守唄である。変化があるのは，最後の「すその縫いめが石だたみよ」の歌詞から，(2)の「もりのういのは～」のメロディーになり変って挿入されている。山手(No.47)にも同歌が見られ，「来年今じぶんこの世なら」「すずめにこまくらこまがえし」の歌詞が異なっている点と挿入歌がない事が変化され伝承されている。



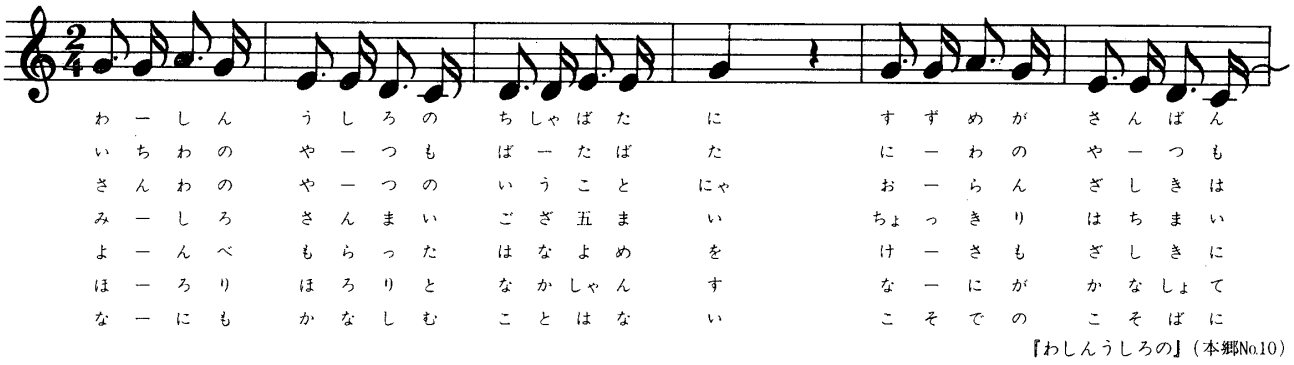
『ねんねんぼうの寺には』（山手No.47）

(5)の「おしろのさおんさのさ」も山手（No.54）に見られる。多少省略されている箇所も見られるが，同歌として扱ってもよいであろう。



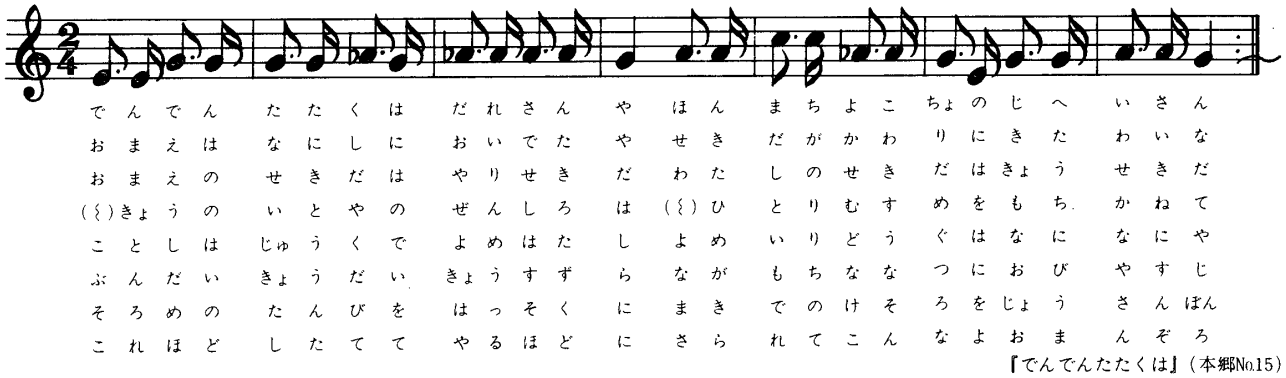
『おしろのせおにさのせ』（山手No.50）

(7)の「うちのうらのちしゃの木に」は，本郷，門入，下開田（No.10，36，87）で採集された「わしんうしろのちしゃ畑に」の類歌と思われるが，旋律・歌詞も変化している。



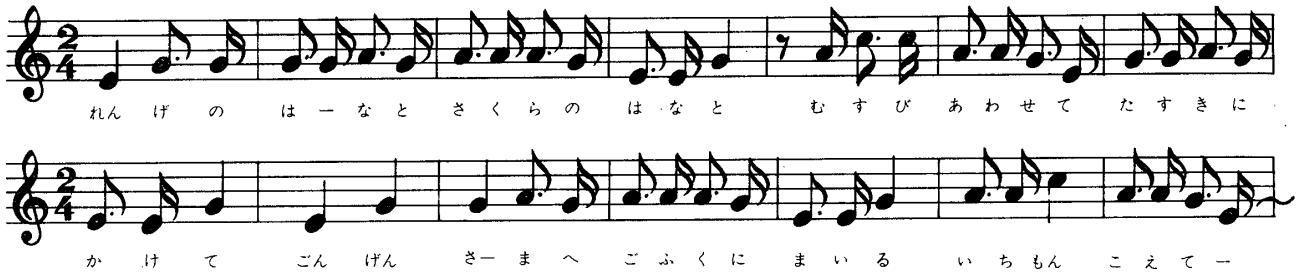
『わしんうしろの』（本郷No.10）

(9)の「大黒様という人は」は，曲が2つに分けられる。前半「大黒様～ここのごろとごろ」，後半「トントンたたくは～ちょっといっかんわたいた」とみなされるが，ここでは一曲としてまとめててまり唄になっている。後半部分が，本郷，下開田（No.3，15，103）の「でんでんたたくは」の，てまり唄の類歌としてあげる事ができよう。前半と後半は数を1から10まで数え，それが戸を叩くに置きかえうまく歌い継がれている。

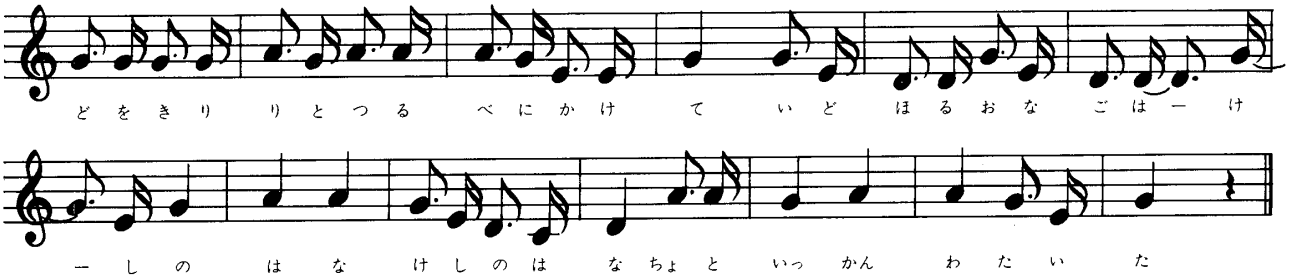


『でんでんたたくは』（本郷No.15）

(10)の「れんげの花とすもとり花と」は本郷，塚（No.5，11，65）に類歌として「れんげの花と桜の花と」に見られる。本郷のこの曲も途中から「向こうの山に光るはなんじゃ」という曲に移ったように思われるが，(10)の「れんげの花～」も「みずくむおなごは～」からは，(9)の曲で類歌としてあげた「でんでんたたくは」の最後の10小節と類歌になっている。

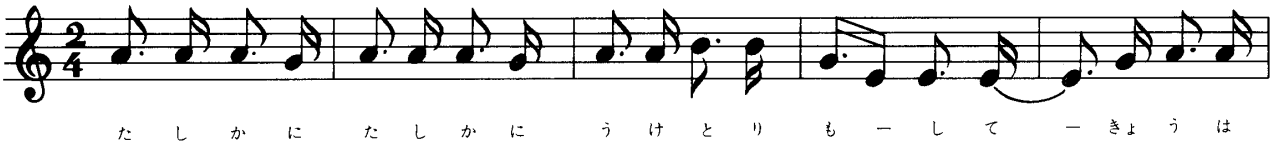


『れんげの花と桜の花と』（本郷No.5）



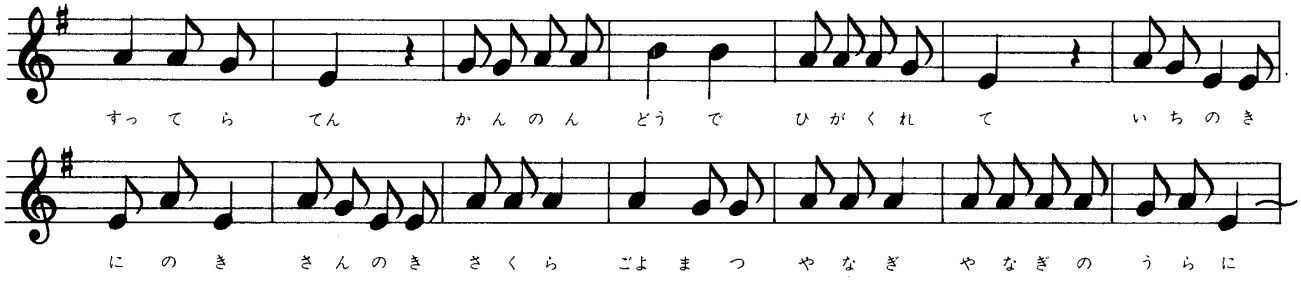
『でんでんたたくは』（本郷No.15）

⑾の「しんしんしっかり」は，本郷で採集された「たしかにたしかに」（No.８）の歌い出しが同じとみなし類歌として扱う。同じてまり唄なので最後はまりを次の人に受け渡すのであるが，歌詞内容は殆んど異なるが，旋法は両曲とも陰旋法となっている。



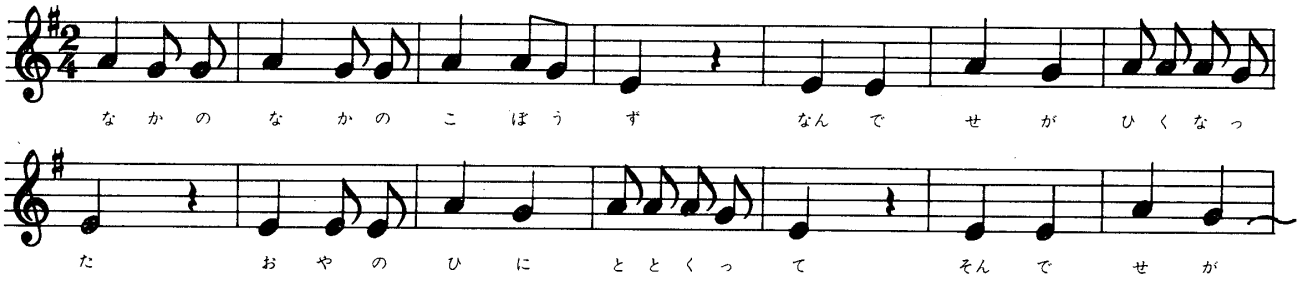
『たしかにたしかに』（本郷No.８）

⒁の「一の木二の木」は，手まり唄であるが，徳山で採集された唄は手おどり唄として全村で歌われている「おおさいどりか」の一部に類似している。（No.２，27，49，60，71，76，83）



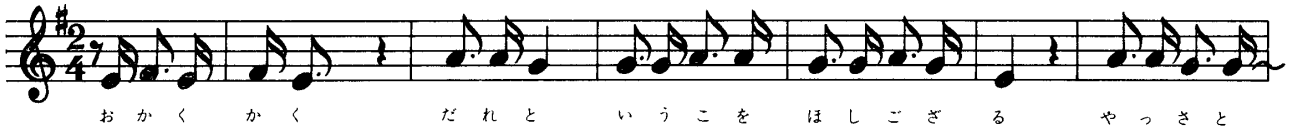
『おおさいどりか』（山手No.49）

⒃の「なかのなかの小坊主」は，全国的にみられる唄であるが，この東横山でも歌われていた。「ぜんまいわらび」ではなく，門入，戸入（No.31，92，98）に同歌があり，門入の清生八重子氏が演唱した「なかのなかの小坊主」（No.31）と全くの同歌である。門入の村人達は，揖斐方面へ出てくる時，戸入～本郷を回って藤橋村へ入るのではなく，ホハレ峠を下り坂内村からこの村に入る道を利用していた。本郷や下開田に歌われている「ぜんまいわらび」とは，伝承の経路が異なったのであろうか，前述した「たごむ」という方言と合わせて，揖斐川に沿った伝承経路とホハレ峠を通った伝承経路の２通りの経路に注目する必要が出てきた。



『なかのなかの小坊主』（門入No.31）

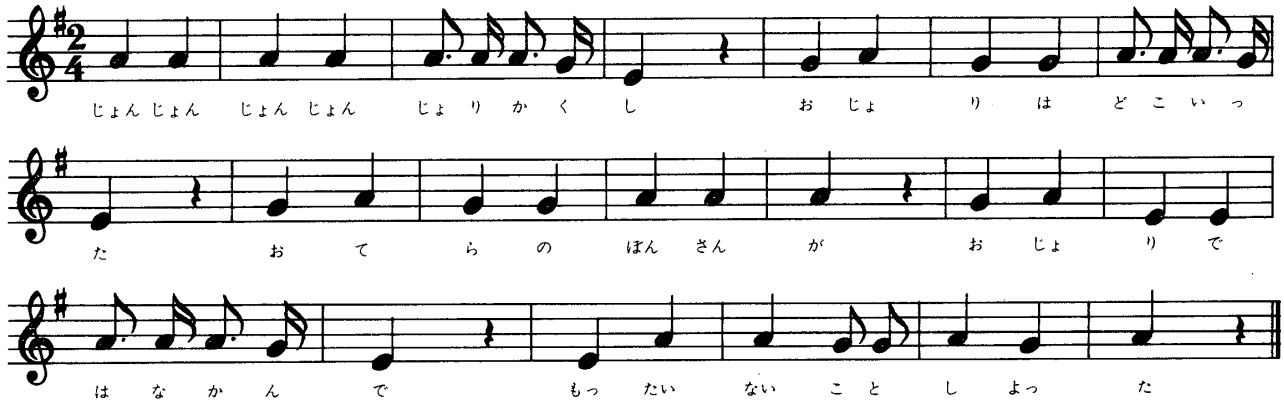
⑰の「おおねのこねの」は，「おかくかく」の同歌で，櫨原，山手，下開田，戸入地域（No.46，58，82，99）に見られる。2つのグループに別れて，子供をもらうのにいろいろなやりとりがされて始めてもらう事ができるのである。歌い出しの歌詞は，戸入が「こかおこかお」，他の櫨原，山手，下開田は「おかくかく」，そしてこの東横山は，「おおねのこねの」である。



『おかくかく』（山手No.46）

⑳の「じょりかくし」は全国的に歌い遊ばれている鬼きめ遊び唄であるが，徳山村でも殆んどの村で採集された。「くねんぼ型」と「じょんじょん型」に分類されるが，この東横山で歌われた唄は，門入の清生八重子氏（大正14年生れ）によって歌われた「おてらのぼんさんがおじょりで鼻かんで」と同歌である。（No.38）同年代の本郷の斉藤みのゑ氏（明治38年生れ）など明治生まれの人達が歌った「じょりかくし」（No.4，16，45，55，69）と比較して見る時，一世代若い人達が歌っていたわらべうたを藤橋村の東横山では歌っていたことになる。この事は「くねんぼ型」のじょりかくしの方が古く，新しい「じょんじょん型」のわらべうたは，藤橋村から徳山村へと伝承・伝播されたことになる。

人の出入が頻繁であったこの村にとって，文化の伝達はより一層早められたに違いない。



『じょりかくし』（門入No.38）

以上，11曲の比較検討を行ったが，同歌が6曲，類歌が5曲となった。徳山村の本郷，山手，櫨原そして門入のわらべうたとより一層連がりを見せ，戸入，塚とはあまり同歌，類歌を見い出す事ができなかった。この事は，伝播，伝承の経路を考える時，納得される現象である。わらべうたは，村々で変化，発展させ歌いつがれ，又広げられる性質を持つが，この東横山でも徳山村のわらべうたと比較した結果この事が言える。

まだまだ地域的，年代的に採集が未熟である。今後の残された課題として，巾広く調査，採集を試みる必要が出てきた。

お　わ　り　に

今回の調査は，徳山村周辺地域のわらべうた調査という目的で，揖斐川下流の藤橋村に焦点をあて，この村のわらべうたと徳山村のわらべうたを比較検討して，それらの伝承，伝播が多少明らかにされた。

今回は一人の演唱者にもかかわらず，20曲という多くの曲を採集し得た。新曲も9曲を数え，新たに調査する時の調査資料として加えられることができた。

これらの成果の上にたって，今後の研究を進めたい。

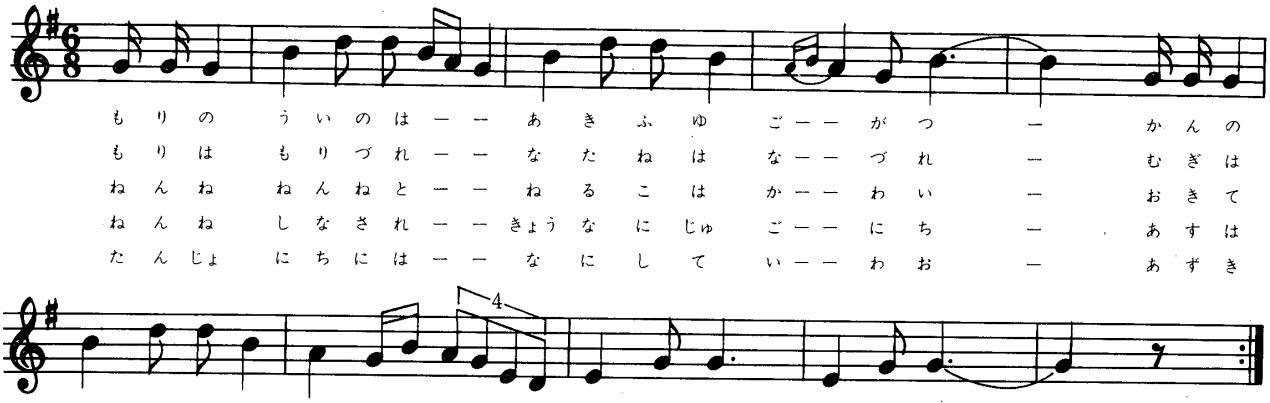
おわりに，演唱者の岸千代氏及び演唱者の紹介の労を取って頂いた横山周導氏に深く感謝する次第である。

参　考　文　献

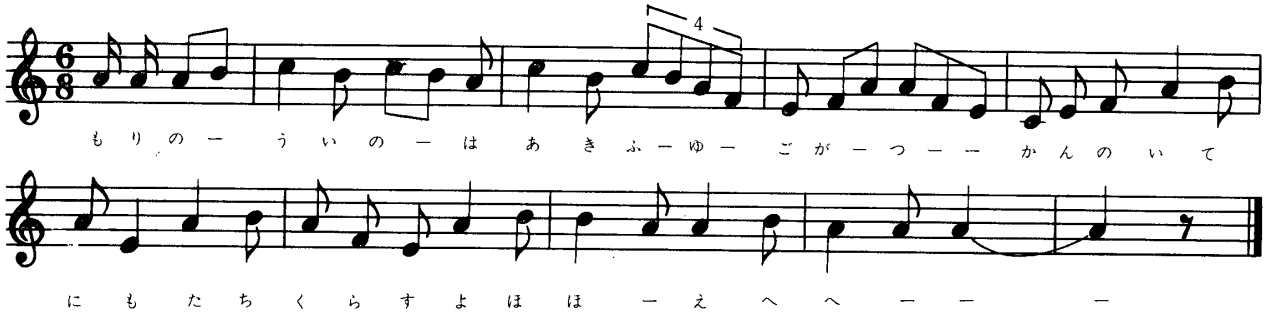
●藤橋村史編集委員会　　藤橋村村史
●久瀬村誌編纂委員会　　久瀬村村史
●聖徳学園女子短期大学紀要第5集
●　　〃　　第6集
●　　〃　　第7集
●　　〃　　第8集
●　　〃　　第9集
●　　〃　　第10集
●尾原昭天編著　日本のわらべうた　戸外遊戯歌編　社会思想社刊
●　　〃　　〃　　室内遊戯歌編　　〃

（1985年10月31日受理）

1．もりのういのはあきふゆごがつ

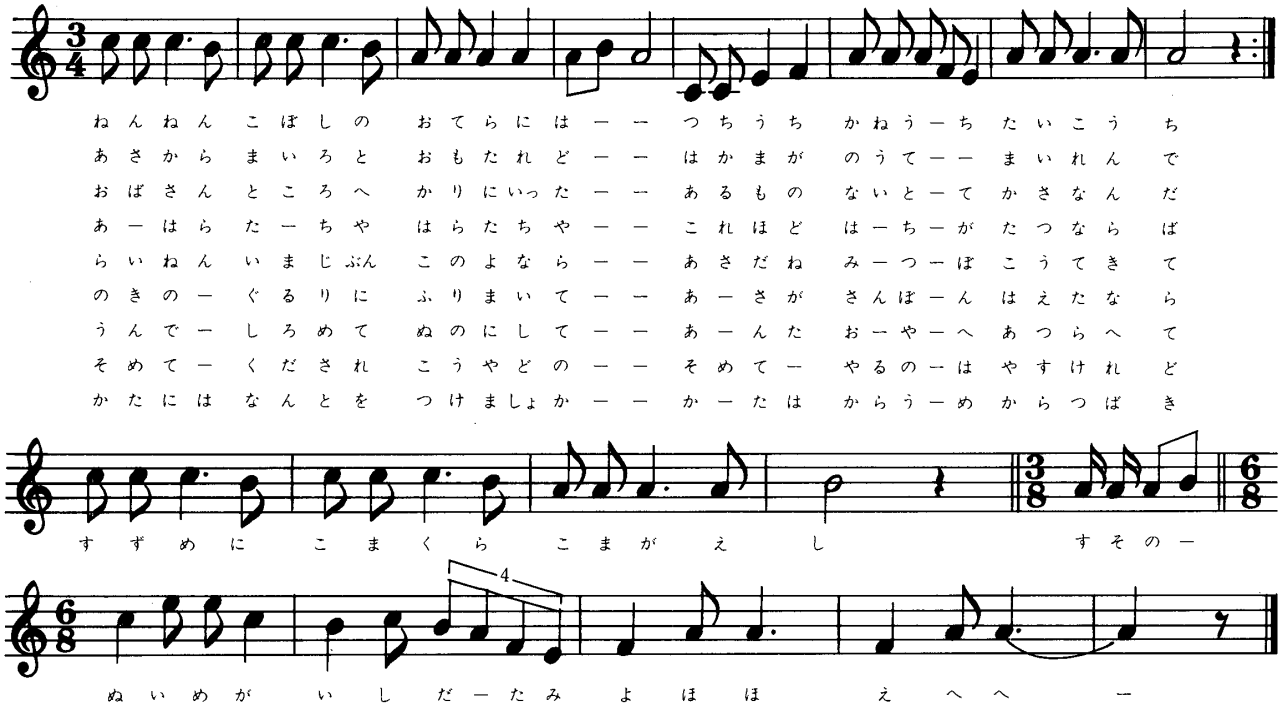


2．もりのういのは　あきふゆごがつ

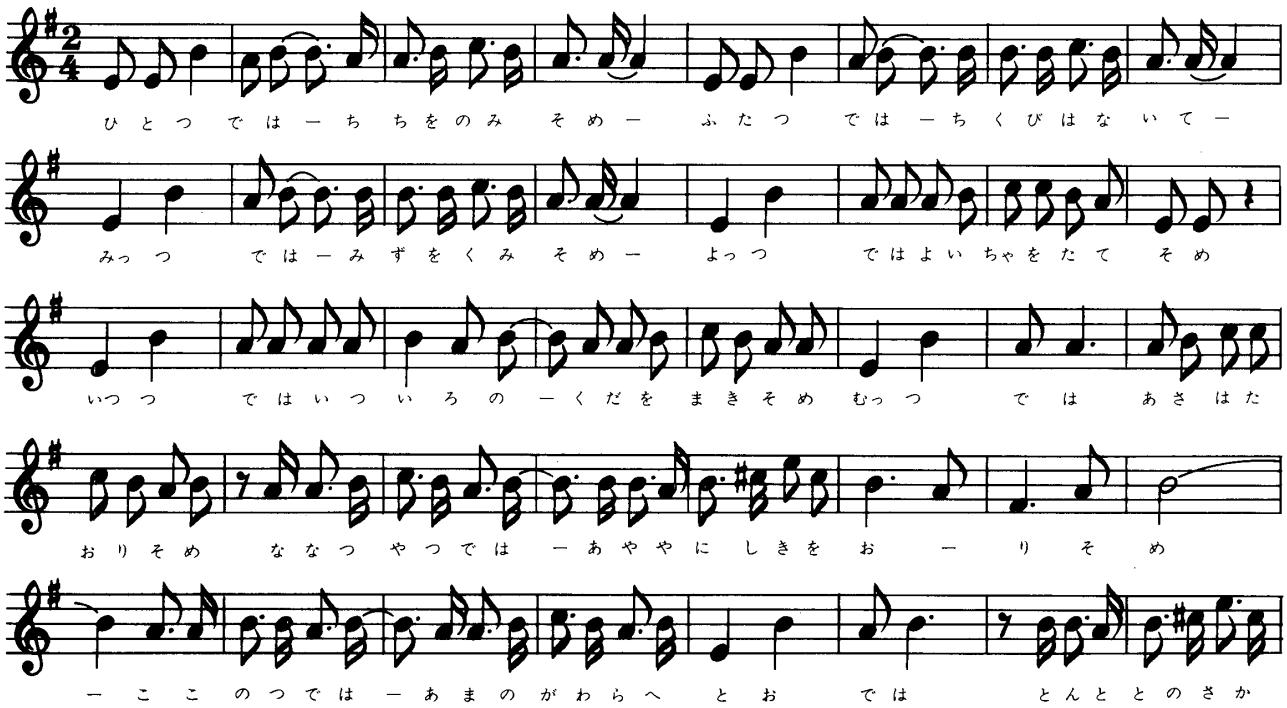


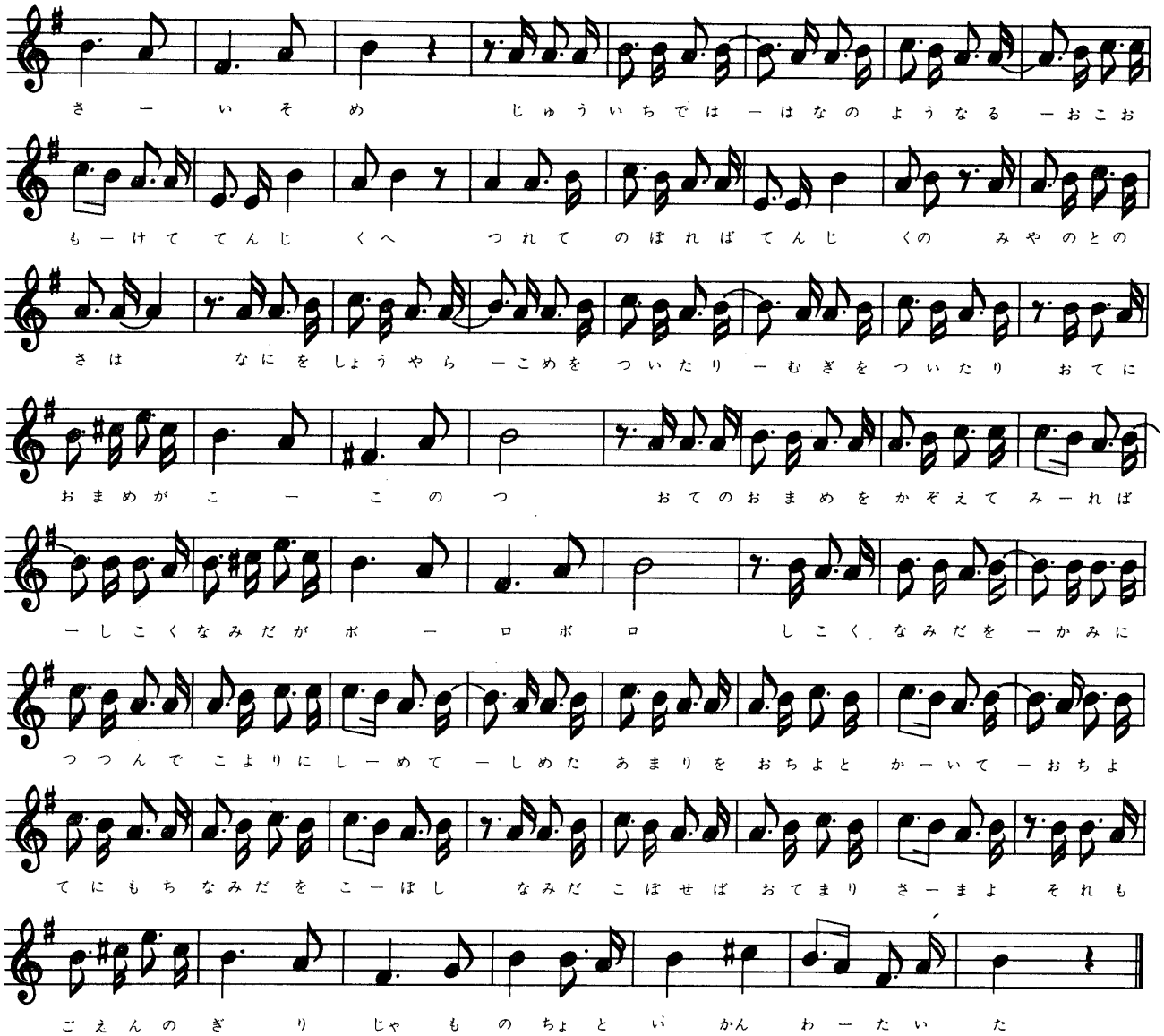
・この子泣くのでわしまでやせる	帯の二重が三重まわる	よほほえへへ
・帯の二重が三重ならよいが	よよっとまわりてふさとなる	よほほえへへ
・泣いてくれるな泣かいでさえも	気づつないぞよひとの子は	よほほえへへ
・こんな泣く子のわしゃ守ゃいやよ	よその泣かん子の守したや	よほほえへへ
・よその子じゃとて泣かん子があろか	泣くで守しる守たのむ	よほほえへへ
・守は気ちがい泣く子をたたく	たたきゃよけ泣くよけたたく	よほほえへへ
・守よ子守よでかわりゃきたが	ここに居る気かおらぬ気か	よほほえへへ
・ここに居る気は少しもないが	この子可愛よてもう半期	よほほえへへ
・ねんねころいち竹うま与市	竹にもたれてねんねしよ	よほほえへへ
・こんな泣く子はわしゃまだ知らぬ	おひま下されだんなさま	よほほえへへ

3．ねんねんこぼしのおてらには

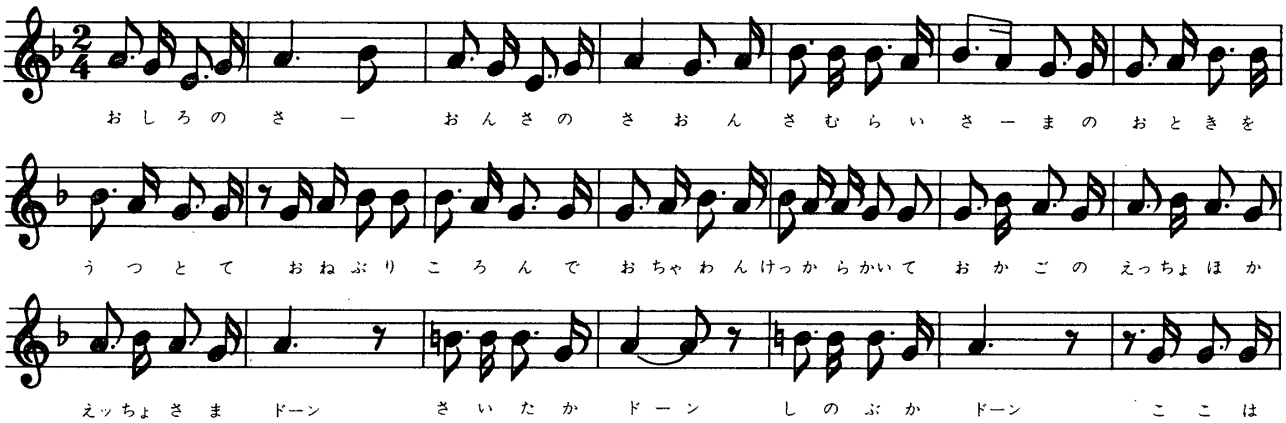


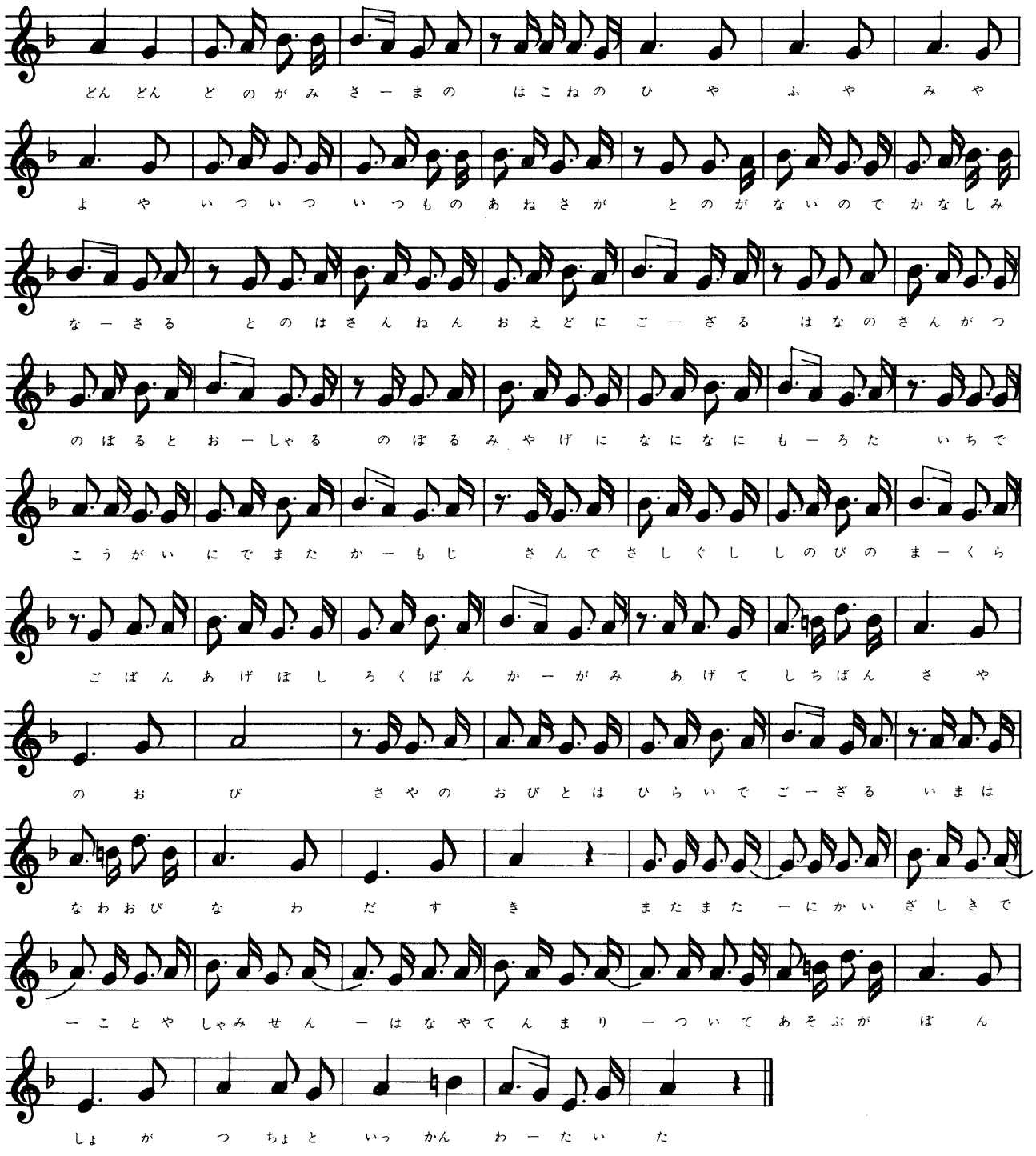
4．一つではちちをのみそめ



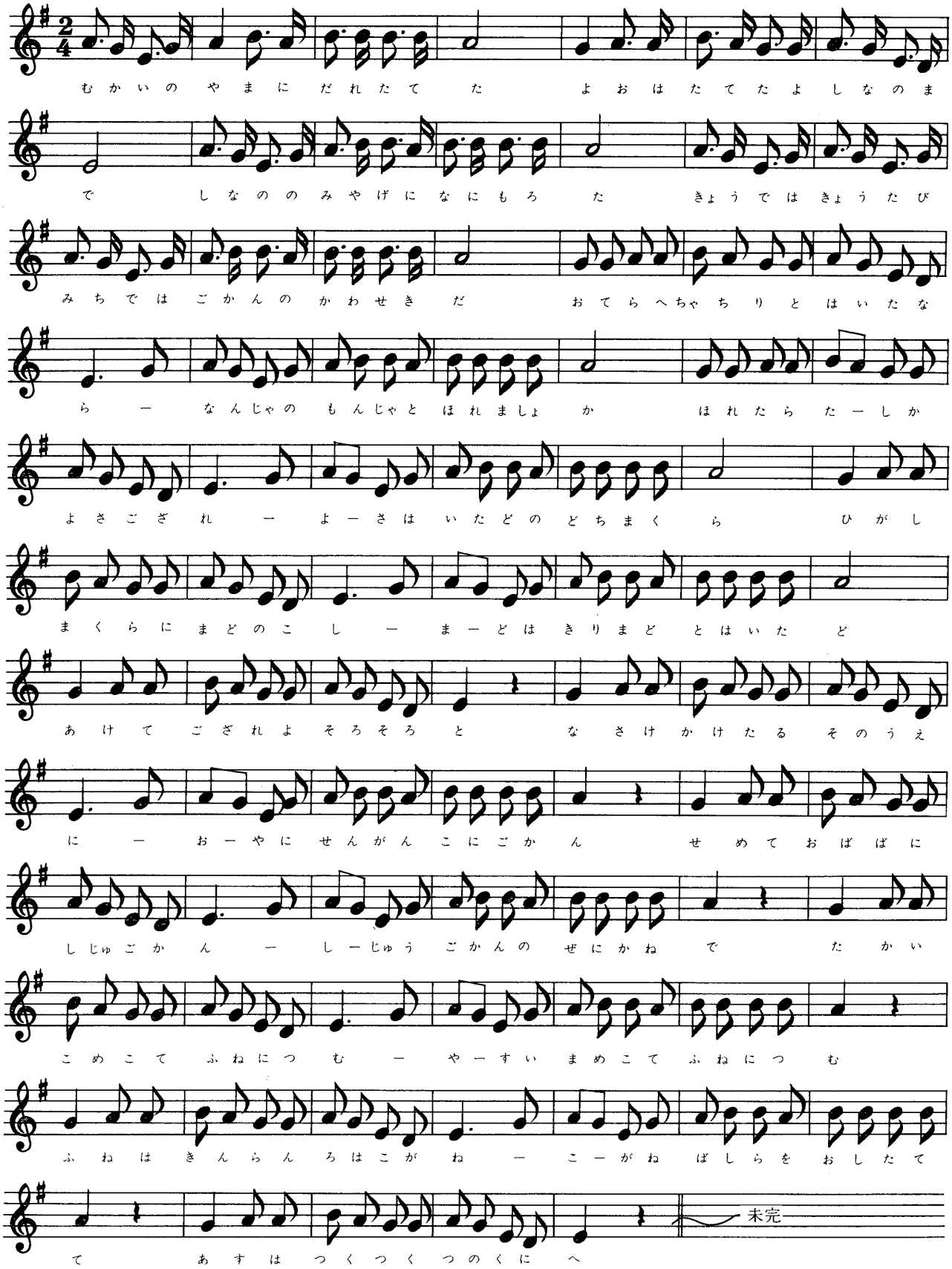


5．おしろのさ　おんさのさ

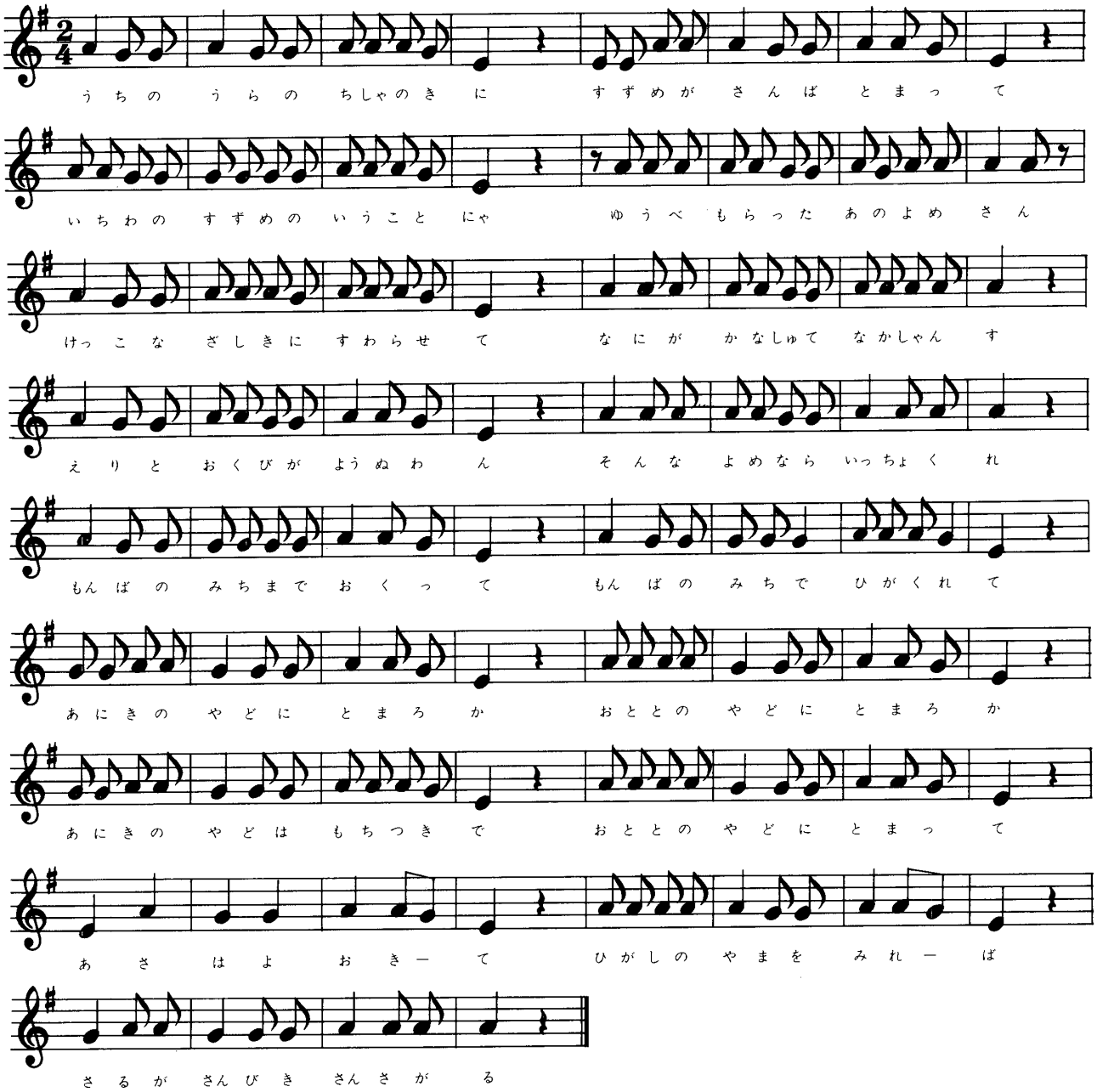



どん どん どのがみ さーまの はこねの ひ や ふ や み や
よ や いついつ いつもの あねさが とのがないので かなしみ
な ー さ る とのはさんねん おえどに ご ー ざ る はなのさんがつ
のぼると お ー しゃる のぼるみやげに なになにも ー ろた いちで
こうがいにでまた かーもじ さんでさしぐし しのびの ま ー くら
ごばん あげぼし ろくばん か ー がみ あげて しちばん さ や
の お び さやの おびとは ひらいで ご ー ざる いまは
なわおび な わ だ す き またまた ー にかい ざしきで
ー こと や しゃみせん ー はなやてんまり ー ついて あそぶが ば ん
しょ が つ ちょと いっかん わ ー たい た

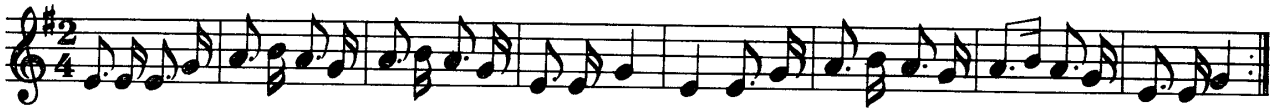
6．むかいのやまにだれたてた



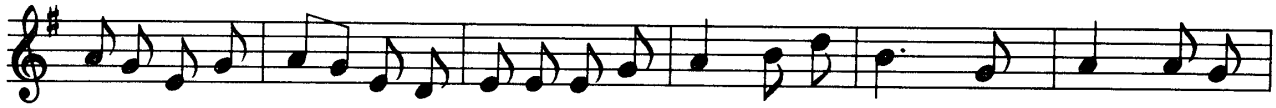
7．うちのうらのちしゃのきに



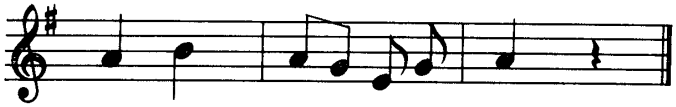
8．ついてこ　ついてこ



ついてこ　ついてこ　えどまで　ついてこ　えどの　おしろは　たーかい　しろで
いちだん　あーがり　にーだん　あがり　さんだん　あがって　ひがしを　みれば
よーーい　よいこが　さんにん　とおる　いちで　よいのが　いとやの　むすめ
にーーで　よいのが　にのやの　むすめ　さんで　よいのが　さかやの　おちょさ
さかやの　おちょさは　だてしゃじゃ　ないか　あぶら　とろとろ　しんとろ　とろと
ごしゃくの　もーとい　きりりと　まいて　あかい　たけなが　ふわりと　かけて
ちゃえんの　したから　こうたで　まねく　いきに　よーろか　かえりに　よろか
かえりの　みやげに　なにくだ　された　あかい　てぬぐい　もえぎの　おーび

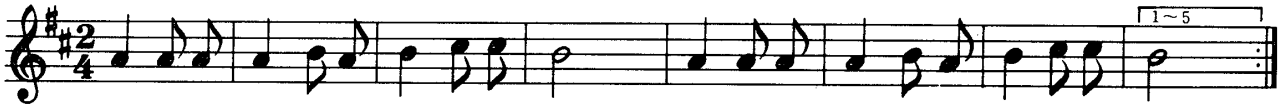


おまんの　へーやへ　なげこん　だなげこ　ん　だ　ちょと

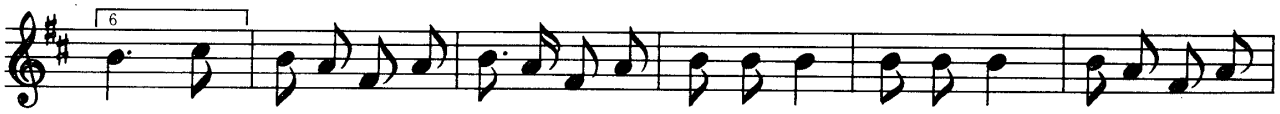


いっかん　わーたい　た

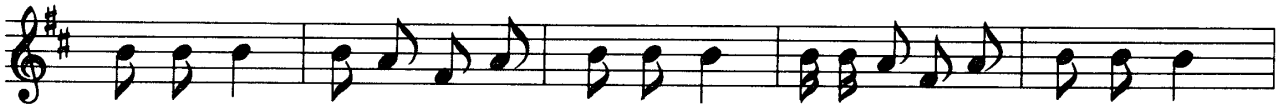
9．大黒様という人は



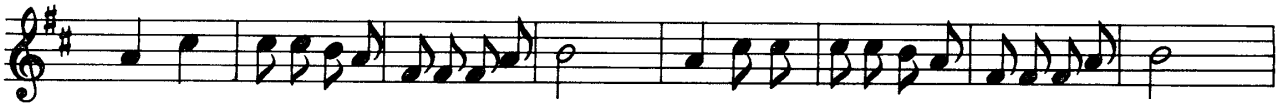
だいこく　さまと　いうひと　は　いしで　たわらを　ふんまえて
にーで　にっこり　わろうて　さんで　さかづきてに　うけて
よーつ　よのなか　えように　いつつ　いつもの　ごくどうで
むーつ　むーりょう　そくさいで　ななつ　なにごと　ないように
やーつ　やしきを　ひろげたて　ここの　つこじきを　はやしたて
とおで　とうきょへ　にげてって　じゅういち　まんざいおめでた



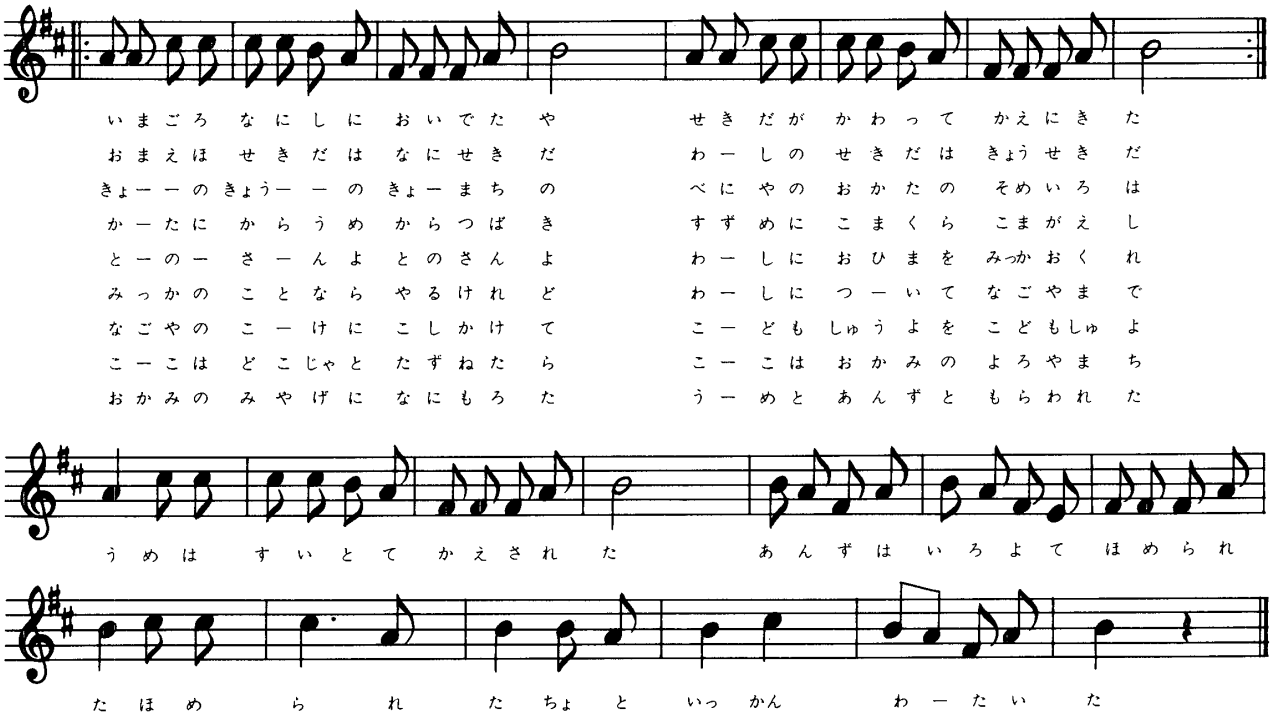
や　ー　ひとごろ　ふたごろ　みごろ　よごろ　いつごろ



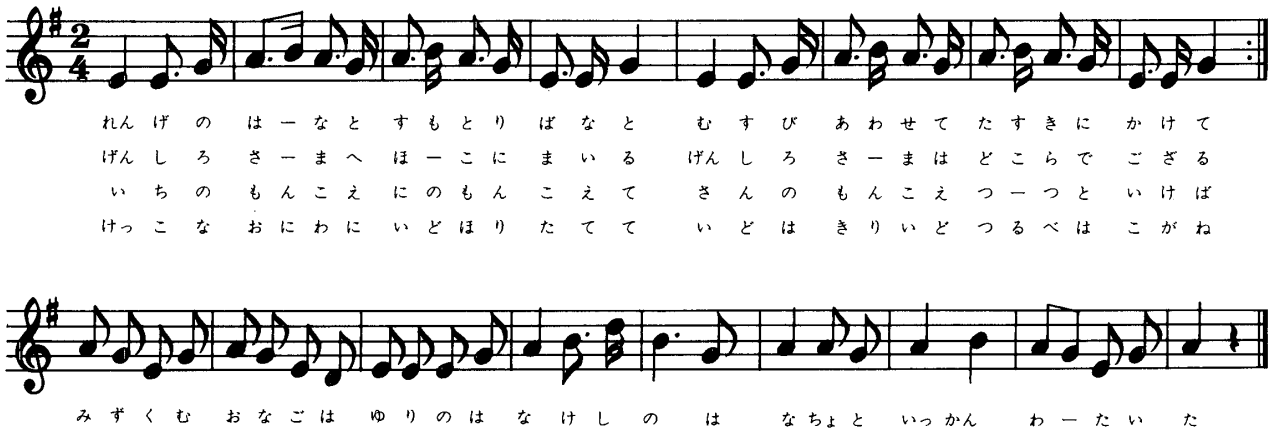
むごろ　ななごろ　やごろ　ここのごろ　とごろ



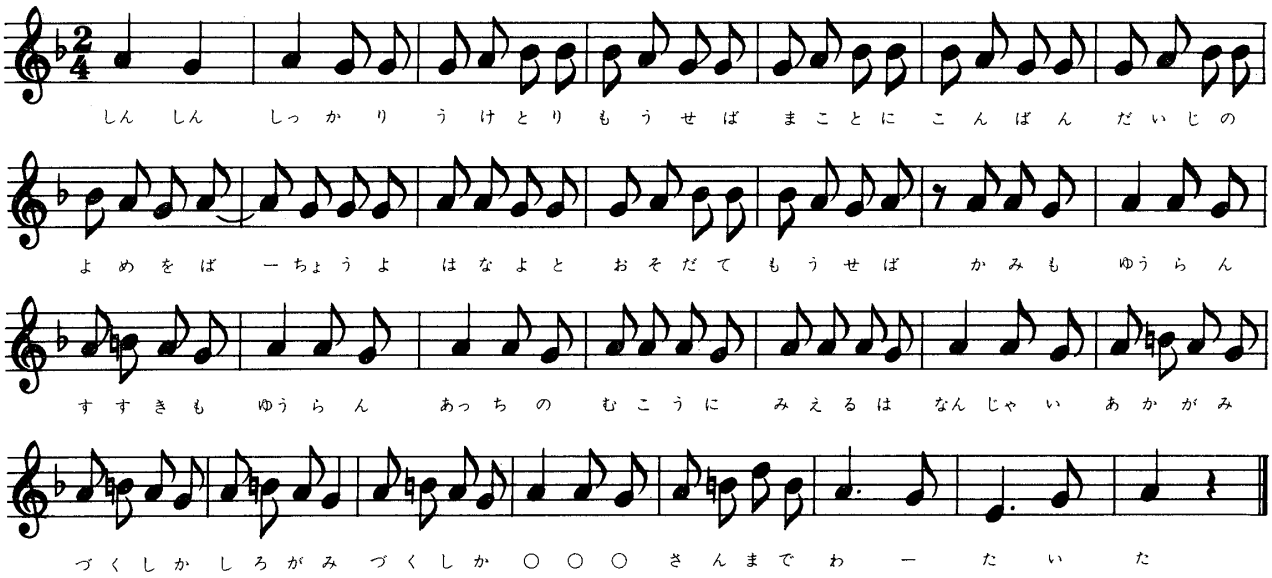
ドンドン　たたくは　だれさんや　しんまち　よこちょの　じろべさん



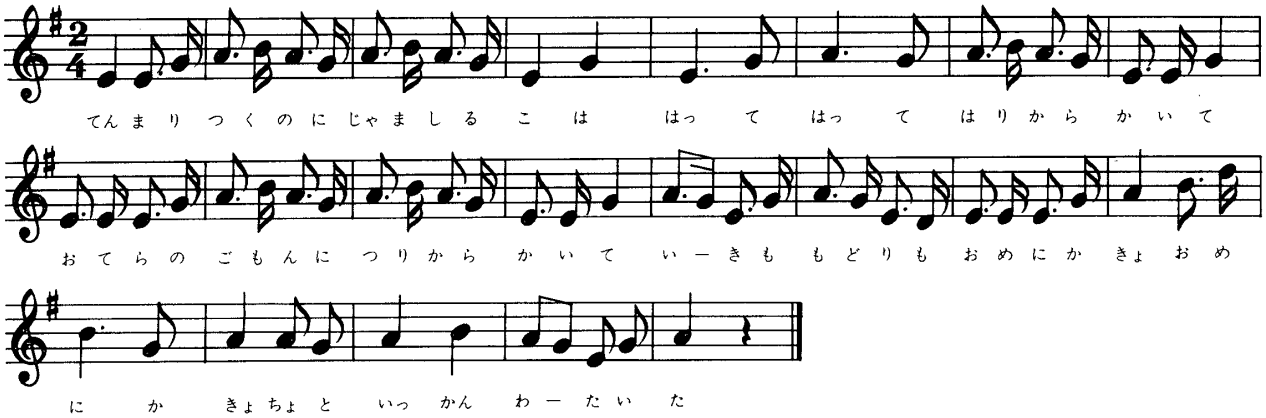
10. れんげの花とすもとり花と



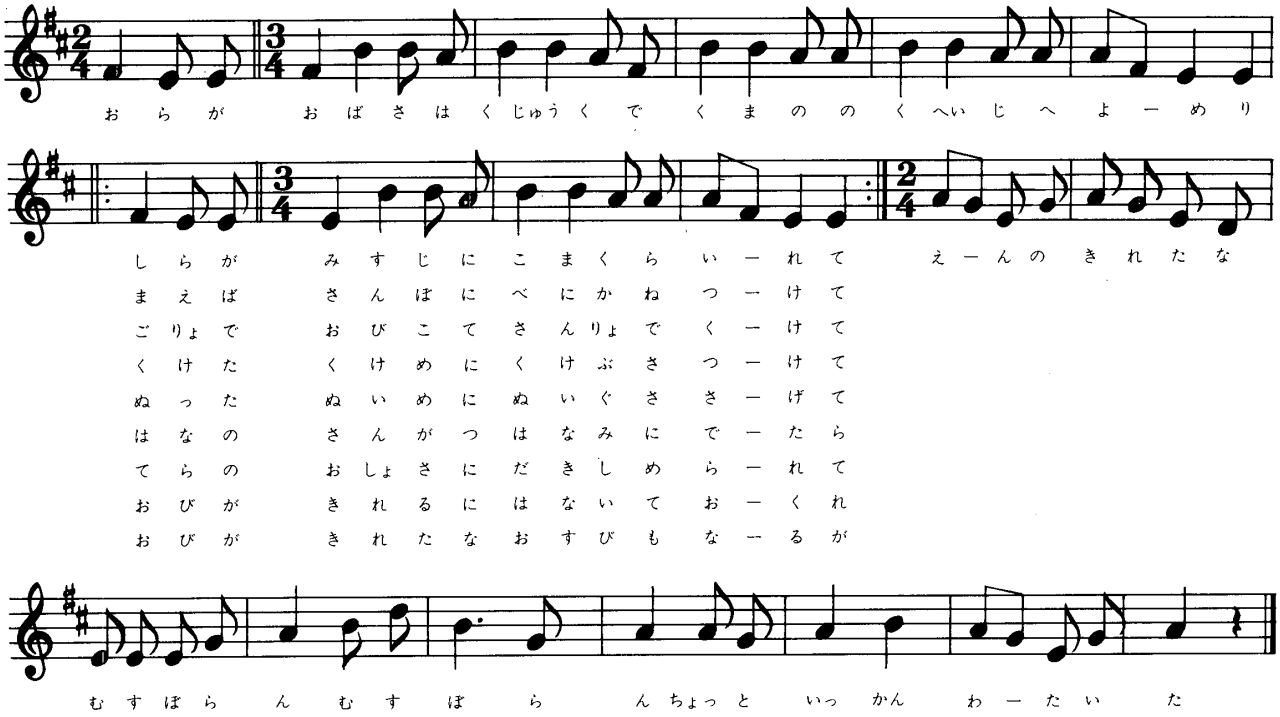
11. しんしんしっかり



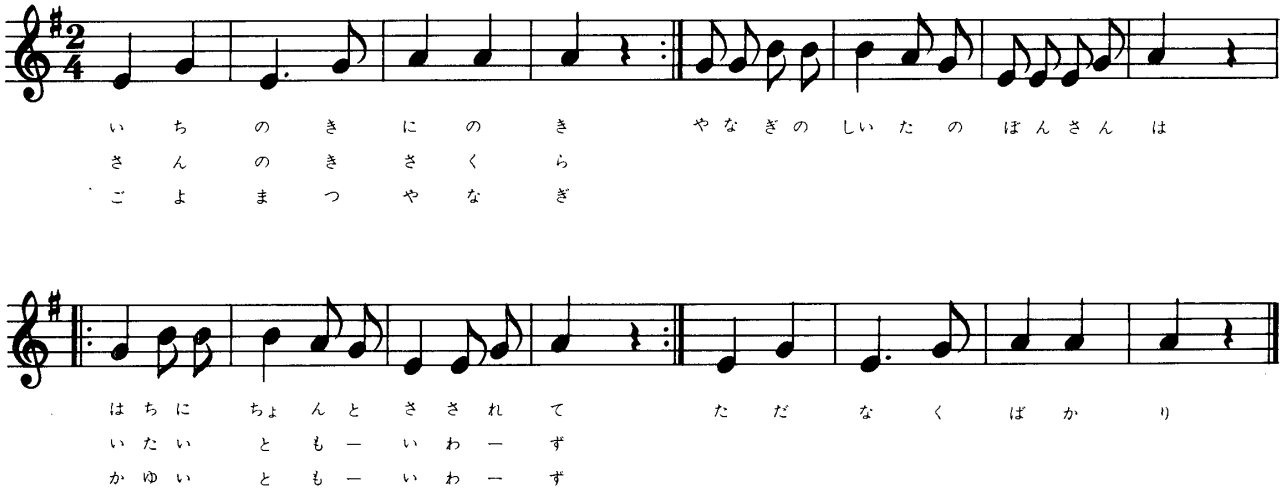
12. てんまりつくのにじゃまする子は



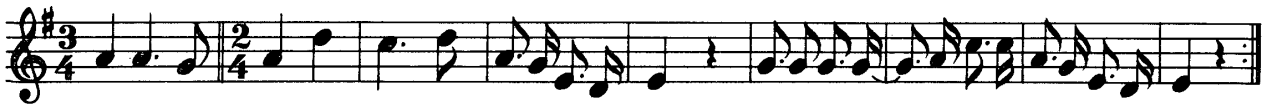
13．おらがおばさは



14．一の木　二の木

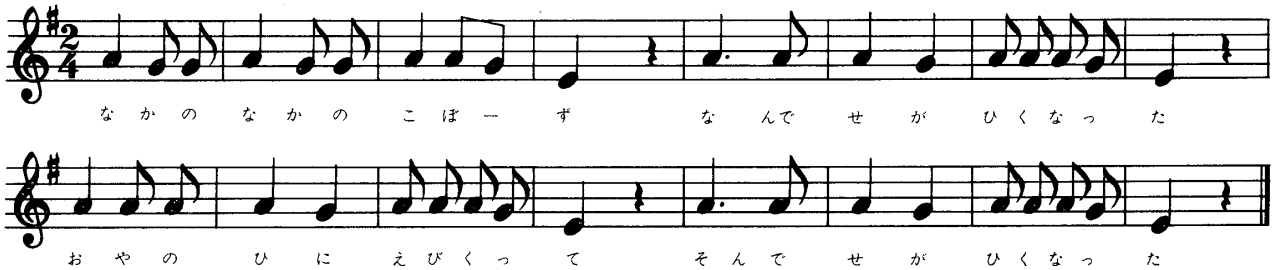


15．うちのおなつは



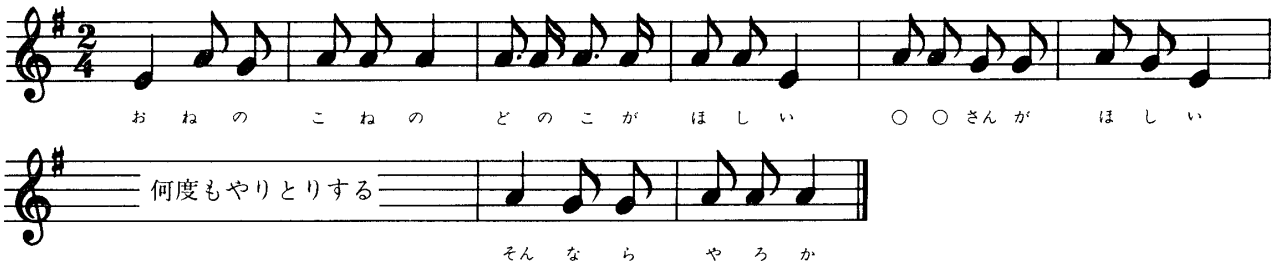
うらの　おなつは　よいさのさ　なぜかみ　ーゆわん　よいさのさ
くしが　ないかよ　よいさのさ　あぶらが　ーないか　よいさのさ
くしも　あぶらも　よいさのさ　てばこに　ーあるが　よいさのさ
たてて　いわなら　よいさのさ　かがみも　ーあるが　よいさのさ
はらに　ななつき　よいさのさ　ややこが　ーできて　よいさのさ
もしも　このこが　よいさのさ　おなごの　ーこなら　よいさのさ
こもへ　つつんで　よいさのさ　おがわへ　ーながす　よいさのさ
もしも　このこが　よいさのさ　おとこの　ーこなら　よいさのさ
つばき　ももよの　よいさのさ　ふりそで　ーきせて　よいさのさ
てらへ　あずけて　よいさのさ　てならい　ーさせて　よいさのさ
きょーへ　あずけて　よいさのさ　きょーいん　ーさせて　よいさのさ
きょーで　いちばん　よいさのさ　おさかで　ーにばん　よいさのさ
さかで　さんばん　よいさのさ　よしので　ーよばん　よいさのさ
よしの　よばんは　よいさのさ　だてしゃで　ーござる　よいさのさ

16．中の中の小坊主



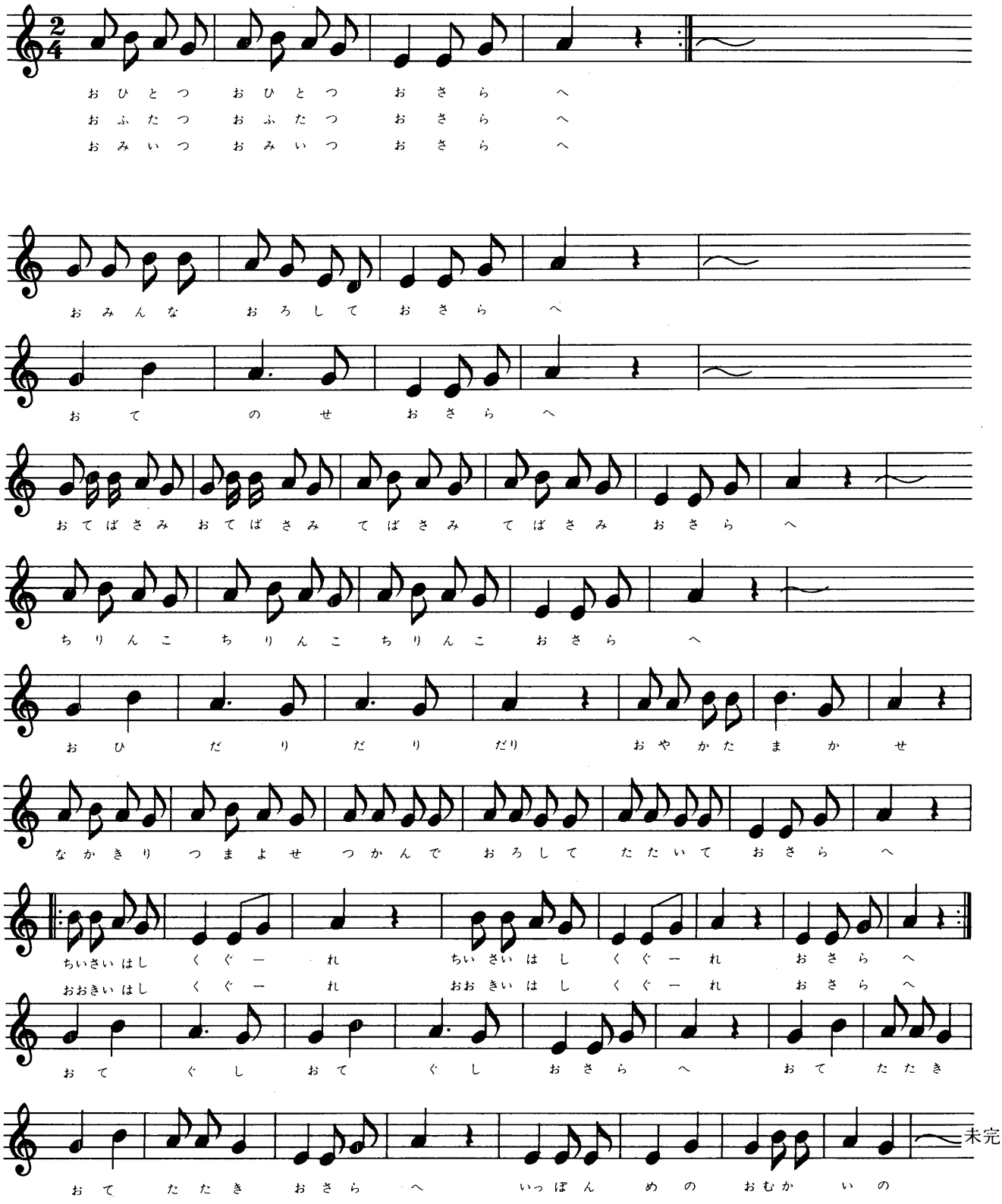
なかの　なかの　こぼーず　なんで　せが　ひくなった
おやの　ひに　えびくって　そんで　せが　ひくなった

17．おおねのこねの

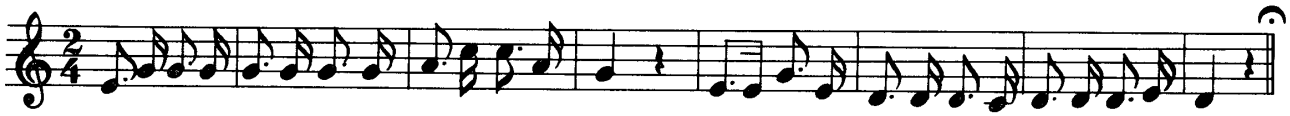


おねの　こねの　どのこが　ほしい　○○さんが　ほしい
そんなら　やろか

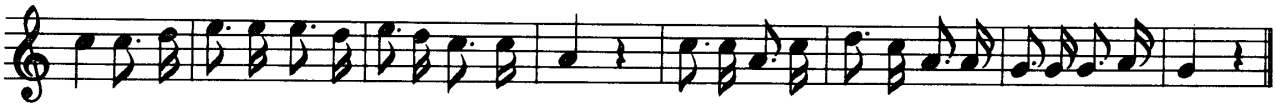
18. おひとつ　おひとつ　おさらへ



19. いちばんはじめの一宮

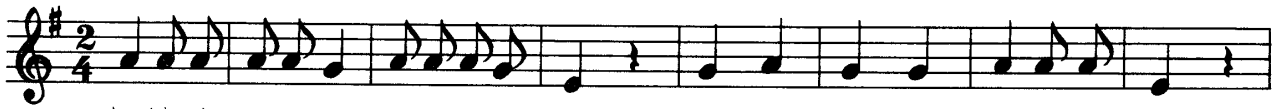


いちばんはじめは　いちのみや　　に一いは　にっこうとうしょうぐう
いつつはいつもの　おおやしろ　　むっつは　むらむらちんじゅさま
ここのつこうやの　こうぼうへ　　と一おは　とうきょうとうしょうぐう

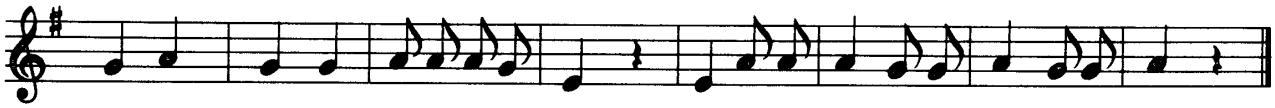


さんにさくらのそうごろう　　しはきたしなのぜんこうじ
ななつなりたのふどうさま　　やっつはやわたのはちまんぐ

20. じょりかくし



じょんじょん　かくし　じょりかくし　　おてらのぼんさんが



おじょりで　はなかんで　　もったいないことしこんしょ